

パンピー向け
習い事と資格受験の本

学習する人生

猿元
MFRI / 2005

占い教室ってどうよ？

どういうわけか知らないが、出勤・通学前の時間のテレビ番組には「本日の運勢」のコーナーがあるし、年末ともなれば、女性誌はこぞって「来年の運勢」を掲載する。ということは、世の中には一定数の占い師がいるはずなのだが、彼 / 彼女たちは一体、どこでどうやって占いのスキルを身につけているのだろうか。もしかしたらどこかに「虎の穴」みたいな秘密の養成施設があるのだろうか。

言うまでもないことだが、占い師になるのに別段、国家資格だの検定だのがあるわけではない。例えばある日突然、神が光臨して、前世や過去が見えるようになってしまった人がいた場合、本人が「今日から自分は占い師だ」と主張して、周りもそれを認めてしまえば、立派な「靈感占い師」の出来上がりである。こう言うと、占い師というのは誰でも安直に始められそうな元手のかからないビジネスのように見えるのだが、手相だの四柱推命だのといった古式ゆかしい占いは、しかるべき師匠について修行して、その団体の免状をもらわないと、金を取って占いができない（どこからか圧力がかかる）という噂も耳にする。ちなみに免状代の相場は安いところでも数万円はするらしい。それではもう少し若いギャルに人気のありそうな「タロット」や「星占い（西洋占星術）」はどうか。占い専門誌の後ろの方に「略奪愛」だの「復活愛」だのと言った広告を出している電話占い師の多くは、多分、学研の「Elfin」シリーズか「魔女の家」あたりの文献を読んで独学で知識を身につけているのだろう。しかし、世の中には意外と多くの占い師養成学校や通信講座が存在する。原宿の「塔里木」がやっている「塔里木カウンセリング学院」あたりが有名所だろう。

そういうわけで、都内某所にある西洋占星術の教室に参加してみることにした。2時間3回程度で終わる入門コースもあったが、せっかくだからプロ養成コースにチャレンジすることに。毎月2回（一回につき1.5時間の授業が2コマ）で、10ヶ月。コースそのものは初歩から段階を踏んで、最終的には最低限の仕事ができるように組んでいる。具体的に言えば、西洋占星術の歴史から始まって、サイン・ハウス・アスペクトといった基本概念、次に未来予測と相性診断の技術、最後にその応用編として、被験者を用意して実占を行ったり、雑誌のコラム書きの練習を行ったりする。全ての技を習得できれば、たしかに誰でも一定水準の仕事はできる……はずなのだが、実際はそううまく行くものでもない。一番困るのは、生徒が教えるまでもなく知識を持っていることを前提にして授業を進めることである。スキルが高く、知識もある占い師が、常によい教師である保障はないのだ。

それではこういう講座に通うのが全く無駄か、といえば単純にそうとも言えない。この業界はどうも、有名な大先生のところから周辺の人に仕事が紹介される仕掛けになっているように見えるので、占いを飯のタネにしたい人にとっては、良い師匠を見つけることは一定の価値があるのかと。もっとも、金儲けに興味がなく、かつ英語に抵抗がない人はAmazon.comで専門書を買って独学した方が、実は手っ取り早いかもしれない。

国際主義者諸君！

不況のせい、教育訓練給付制度の支給額が減ったせいは知らないが、最近、人気に陰りが出てきたものの、それでも英会話はメジャーな習い事であろう。有名どころチェーンでは NOVA や AEON などがある。少し古い話になるが、20 世紀末あたりにおける某有名チェーン校の状況を書いてみよう。

この手の英会話教室というのは普通、「大人数クラス」と「少人数クラス」というものがある。人数については読んで字の通りであるが、教授法の次元で全く別のものなので、どちらが自分に向いているか見極める必要がある。大人数クラスにおいては、「旅行中」の「買い物」といったシチュエーションを想定して、そこで使用できる典型的な文例の修得を目的とした会話練習が行われる。一方、後者では一定の場面なりテーマなりに関連するテープや、一定の長さの文章を踏まえた上で、その内容について強制 Discussion が行われる。

「年に一回の海外旅行先で英語を使ってみたい」というブルジョワな OL さんなら前者で必要にして十分だが、実際のところ、NHK のラジオ英会話でも必要な目的は達成できそうな気がする。それでは後者はどうか。これも生徒の学力に応じて日常周辺の話から、政治・経済のトピックまでいろいろと用意されているわけだが、おそらく、最大限の壁は「日本語で話せないことは、英語でも話せない」という所にあるように思われる。考えてもみて欲しい。「動物愛護団体の奴が研究所を破壊した挙句、研究者を吊るし上げた」なんてニュース記事を読んでディベートなんて、生粋の日本人には（日本語でも）無理であろう。

なお、大手英会話教室は英検なり TOEIC などの対策講座を開いていて、自己啓発系リーマンたちはそちらに流れている様子。この手の講座は、教育訓練給付制度の対象となっていることが多いので、「雇用保険の一般被保険者であった時期が通算 3 年以上 5 年未満」（で、職日から受講開始日までが 1 年以内）の人は、受講修了日の翌日から起算して 1 ヶ月以内にハローワークで支給申請手続きをすれば、訓練費用の 20%（最大 10 万円）がペイバックされ、被保険期間が 5 年以上の人はこれが 40%（最大 20 万円）となる（過去に教育訓練給付金を受給したことがある場合は、過去の受講開始日以降の被保険者期間が 3 年以上あれば受給の資格あり）。それでも年 15～30 万円ぐらいはかかってしまうわけですが。

ところで、世の中には英会話教室を「出会い系」と認識している向きもおおいのご様子だが、実際の所はどうなのか？ たしかにハローウィンだのクリスマスだのと理由をつけて、1～2 ヶ月おきに教室外でイベントは行われる。こういうものは異性（あるいは同性）との単純接触の機会がないだけの人ならば使いようもあるが、「恋愛のスキルそのものがない奴」には何の役にも立たないので、過剰な期待は持たない方がよいと思われる（男女・年齢問わず）。

結局のところ、大多数の人にとって、この手の語学学校は友達同士の茶飲み話のネタにするぐらいしか使いようがなさそうな気がする。そもそも、年に一回の海外旅行のために、それよりも金がかかる英会話教室に通うのはナンセンスでしょうし。

料理教室に潜入！

英会話と並んでメジャーな習い事と言えば、やはり「料理教室」でしょうか。「嫁入り前」のお嬢さんの必須アイテムとされていた時代もあったようですが、今では単身赴任や熟年離婚組みの中年・老人ヲヤジどもの間でも「男の料理」が大ブレイクの兆しを見せているそうですし。

おそらく、日本でもっとも大手のチェーン系料理教室は「ベターホーム協会」(<http://www.betterhome.jp/>)がやっているものだと思う。また「全国料理学校協会」(<http://www.zen-ryou-kyou.com/>)所属の料理教室を卒業すると、同協会技術検定委員会の検定証がもらえるそうだ。電話帳やネット検索で調べればわかるように、この他にも大小の独立系料理教室が乱立している。授業料は概ね、月一万円前後に設定されているようで、気のきいた所は「一日体験入学」もやっている。

ということで、ある日（平日夜）における、独立系料理教室の様子を書いてみよう。ここは「料理専門学校 某有名ホテル厨房勤務 教室開講」という経歴の人が個人で運営している所で、月3コマ（うち一回は製菓）開講。特徴的なのはその客層で、ここ5年間ぐらいいの間に20代後半～30代後半男性比率が急増。現在では多分、男性：女性が4：5ぐらいに近づきつつある。コースは3年で終了するのだが、男女問わず、かなりの割合（多分、2割以上）が3年以上在籍している（入って半年もせずに寿退学する人も多いのだが）。余計なことを書いておけば、男性は技術者と公務員ばかり（なぜかホワイトカラーのリーマンは少ない）で、女性は看護師とか保母とか、手に職を持っている人が多く、学生とか家事手伝いの人は思ったよりも少ない。年齢の中央値は30過ぎ程度であり、年々、微妙に高齢化が進んでいるご様子。

多分、普通の人には料理教室というと学校の「調理実習」を想像すると思う。すなわち、「まず最初に作業手順の説明があって、次に1～4名ぐらいのグループでステップを追って、料理を完成させる」といった感じである。ところがここのシステムはそういう素人に優しいものではない。メニュー（通常、4品）が当日までわからないのはデフォルトで、作業手順の説明もさっくりと省略。集まった人から順番にどんどん作業が命令されて、多重に教室の各所で作業が進行していく。要は実際の商業調理現場と同じことをやっているのだが、一応、教室なので、キーポイントとなる所だけは全員集合して説明が行われる。とまあ、こんな按配なので「包丁を持ったこともなければ、カレーの一つも作ったことがない」ようなお嬢さんがやってきても、訳わからないままに作業が終わって、食事タイムとなってしまう。こういうことが続くと、今時の根性lessなヤングは早々に辞めてしまうわけだ。ついでに書いておけば、食事タイムには「歓談すること」が推奨されているようだが、皆さん、マナーが良いのでほとんど会話がなにも多々あるご様子。まあ一般的な話題が得意な人が少ないというのが最大の問題点な訳ですが。

そんな訳で、教室は自分に合ったところを探すのが重要です。はい。

女子大に逝こう！

2004 年度よりお茶の水女子大が「化学・生物総合管理の再教育講座」というのを実施している。それなりの人（実務担当者も多い）が講師をやっていて、見る人が見れば、「これで受講料タダというのは信じられない」といった水準のものである（実は文部科学省科学技術振興調整費がつぎ込まれている）。「化学物質総合評価学」とか「生物総合評価管理学」といった、露骨に業界人の役に立ちそうな講義は平日に行われており、大して金になりそうもないものは、土曜日に集中講義が行われていた模様。

そんなわけで実際にお茶大まででかけてみることにした。講義は全 6 回、朝 10 時から夕方 17 時半まで、90 分 4 コマ。講師は「科学技術文明研究所」のスタッフが交代で担当。余談ながら、このインチキ臭い名前の研究所は、元々、三菱化学の持っていた生命科学研究所の科学技術文明研究部が独立して株式会社化したもので、30 年以上の歴史がある。日本では生命倫理関連コンサルに関する一定のニーズがあるにも関わらず、案外、専門家が少ないので、このシンクタンクは行政や医療・薬事関連研究機関から、かなり便利に使われているという噂もある。

さてこの「生命倫理学概論Ⅰ」だが、講師も「弁護士から法務省を経て医学部に入りなおし、今に至る」といった激しい経歴の持ち主がいるかと思えば、受講生も「現役法学部助教授で遺伝医療関連法が専門ですが、何か？」「何気に、バイオで飯食ってますが」みたいな奴が集まっていて、いろいろと油断ならない（講義スライドに容赦ない突っ込みが入ったりもした）。客層は元企業研究者のリタイア組や、元女子大（師範学校）生で 70 歳超みたいな年寄りが 10 人弱、同数ぐらいがイヤな現役労働者組（Y 新聞の科学記者もいた）。現役女子大生は参加すると単位になるにも関わらず、実際は大学院生が一名のみ。

各コマの講義は大体、一時間程度で終わり、その後 10-15 分程度 5 人ぐらいで議論を行う。それを元に各人が 10-15 分でレポートを作ることが要求されるわけだが、そのテーマがなかなか厳しい。強制 Discussion においても「議論のお作法」を知らない人ばかり集まっているので、なかなか実りのある議論ができない。皆さん、結構、高度な学校教育を受けて、しかも社会的にもそれなりの仕事をされてきた方のはずなのに、「そもそも問われていること（何を回答すべきか）が把握できていない」だけでなく、「誰も喪前のチラシの裏になど興味はない」「だから、あんたの主観やデムパには興味ないって」といいたくなるような奴が多杉。学問の世界では、親切に相手のフィーリングを理解してやらなければいけない義理はないし、きちんと筋道を立てて論証を行わないと、自論を理解してもらえないと思っておいた方がよいと思うのだが、どうもそういう常識と思えることが、一般社会では当たり前のことではないことが再確認できる。

多分、この講座は平成 18 年度も前・後期開講されると思うので、興味のある人は時々、「公開講座・セミナー」のサイト（<http://www.ocha.ac.jp/koukai/>）をチェックしておくことをお勧め。なお、全講座終了後にレポートを出すと、立派な終了証がもらえます。

めざせ！パティシェなにな 二

ほとんどの人が聞いたことがないと思うが、「製菓衛生師」という資格がある。要は「調理師」のお菓子屋版と思えばよい。名称独占資格なので、別にこの資格がなくても、腕とセンスが良ければパティシェにはなれる。調理師については「多数人に対して飲食物を調理して供与する施設等」に対する配置努力規定があるのだが、製菓衛生師についてはこういうものはないので、持っているカッコいい以上のものは期待できない。

この資格を取るためには都道府県知事が行う試験に合格することが必要で、受験資格は2年以上の実務経験か、専門学校卒業である。なんでも受験生の3-4割は不合格らしいが、それは中卒（一部高卒）DQNがかなり混じっているからで、実際のところ、試験問題はそれほど難しくなさそうな雰囲気。試験は「衛生法規」「公衆衛生学」「食品衛生学」「栄養学」「食品学」および「製菓理論」「製菓実技」で、後者二つ以外は調理師試験と同じものを使っているところもあるらしい。試験問題は各都道府県とも公開しているのだが、このご時世に「庁舎まで見に来い」みたいな態度を取っているところも多い。大阪は通販しており、茨城・新潟・長野・秋田はオンラインで試験問題を公開している。受験問題集としては「解いてわかる製菓衛生師試験の手引き」（大阪あべの辻製菓専門学校編 柴田出版 2003）がある。長野の場合、「全体で正解6割以上、一科目でも0点がなければ合格」らしい。一般人が受験資格を得るためにはどこか学校に入る必要があるわけだが、通学で一年、通信制だと普通は2年コースで、学費がトータルで30-40万円ほどかかる。全国菓子工業組合連合会のサイト（<http://www.zenkaren.net/>）に詳しい情報があるので、興味のある人はそちらを参考にされたい。なお、自宅に実習用のオーブンレンジは必須である。

そういうわけで、某専門学校の「製菓製パン衛生師学科」通信課程に入学してみた。最終学歴の卒業証書（学位記）のコピーと、数百字の「入学理由」作文だけで、お手軽に学生証が get できる。（多分、学校によって異なると思うが）私の入っている所は、2ヶ月に一度、教科書の穴埋めや抜き出しだけで対処できるようなレポートを2通送れば、教科科目はクリアできる。真ッ当な社会人にとって問題なのは、計20日間程度のスクーリング（必須）だが、これは8月と2月に5日ずつ、計4回行うことになっている。どういうものかと言えば、一回につき計2日分が面接講義で、残り2日半が製菓・製パン実習、最後半日で確認試験。面接講義は澱粉を「でんこ」と読むような奴や、反 GMO の闘士、怪しげな企業コンサルタントみたいな奴がやってきて、やる気があるのかないのかわからないような話を90分間、延々と繰り広げるというもの。実習はそれほど高度なものは作らないが、忘れた頃になって家庭実習レポート（2回ある）の課題になったりするので油断できない。最終試験はそれまでの面接授業の中から出るので楽勝なのだが、初日に参加できなかったりすると実力で試験を受けるハメになるので要注意である（それでも6割は取れますが）。

余談ながら、この通信課程の客層は「ハードゲイ」好きな腐女子二人（20代後半）と、製菓専門学校中退のDQNギャル（レポート滞納中）らしい。かくも無残。

「食のプロ」になりたい！

リクルート社の「ケイコとマナブ」(<http://www.keikotomanabu.net/>)なんかを眺めていると、どうも世間には「食のプロ」になりたい女性が多いみたいだ。食のプロといっても、日本冷凍空調学界(<http://www.jsrae.or.jp/>)の「食品冷凍技士」とか、日本惣菜協会(<http://www.souzai.or.jp/>)の「惣菜管理士」のようなイケてないものではなく、「フードコーディネーター」(日本フードコーディネーター協会)とか「フードスペシャリスト」(日本フードスペシャリスト協会：学歴要件あり)「ベジタブル&フルーツマイスター」(日本ベジタブル&フルーツマイスター協会：指定講座受講&試験)といった、横文字系協会認定資格や、FLAネットワークの「食生活アドバイザー」検定が人気のご様子。あと以外と持っている人が多いのが文部省認定「家庭料理技能検定」で、これは「魚の3枚下ろし」ができると2級らしい。フードスペシャリストについては、家政学部系の先生方がリキ入れてやっている様子が、某関連学会誌を見てるとわかったりするのだが、いずれも持っているからと言って、食品会社への就職が容易になるなどのメリットはあまり期待できそうもない。はっきり言って、暇なOL or 家事手伝いの人たちの自己満足か、話のネタ以外の使い道は思いつかない。

ということで、話のネタに今世紀始めに「食生活アドバイザー」2級試験を受けてきた時に話でも。まず受験願書はFLAネットワークのサイト(<http://www.flanet.jp/>)から無料で手に入る。試験科目は「栄養と健康」「食文化と食習慣」「食品学」「食マーケット」「衛生管理」「社会生活」と幅広いが、いずれもその世界では知っておいて当然な、常識レベルの話ばかり(多分、レベルは調理師試験と同程度だと思われる)。中経出版から出ている公式問題集を一読して「何言っているか理解できない」と思った人は、同社の「食生活アドバイザー検定 2級に面白いほど受かる本」を買うべきだと思うが、問題集のみでも何とかかなりそうな気がする。「過去問」も販売されているが、必要かどうかは微妙なところ。多分、多くの人は3級と2級、どちらを受験するか迷う所だと思うが、勉強に要する時間がそれほど変わるとも思えないので、初めから2級を受験することをお勧め。2級には「記述式」問題があるが、これは説明文に対応する単語を書くだけのものなので、(漢字をきちんと覚えておけば)それほど問題はない。東京会場の試験では、受験生のほとんどが女性で、年齢は大学生程度から「みのもんだ」のいうところの「お嬢さん」まで幅広い。きちんとノートを作って勉強している人も目立ち、私のように問題集を斜め読みしただけで試験に臨んだ人は少数派の予感。それでも合格してしまえば、もらえるものは一緒なので、最小限の努力で合格するのが吉かと。なお、昔の合格証はA4用紙に打ち出しだったが、最近は携帯型になっているそう。もっとも、どういうシチュエーションでこれが使えるのか、激しく謎だったりするわけですが。

「メイド喫茶」を開くための資格

「食生活アドバイザー」は民間資格（検定）であるが、資格マニアの必須アイテム「食品衛生責任者」は立派な公的資格である。漫画喫茶だろうがカラオケ屋だろうが食品を扱う施設・店舗（営業許可施設）の営業者は必ず食品衛生責任者を設置する義務があり、スーパーの魚売り場の横や、地元の定食屋・飲み屋の厨房の隅にもよく標識が掲示されているのを目にする。よく似た言葉に「食品衛生管理者」というものがあるが、これは全粉乳、加糖粉乳、調整粉乳、食肉製品、魚肉ハム、魚肉ソーセージ、放射線照射食品、食用油脂、マーガリン、ショートニングおよび添加物の製造・加工所に置くことが義務付けられているもので、一定の資格（医師・歯科医師・薬剤師・獣医師）、学歴（前述の資格が取れる学科ならびに畜産・水産・農芸化学科卒）がある人以外は、資格を得るために実務経験＋30日以上（35万円）の講習会（35万円）の参加が要求される。この資格が必要とされるような職場には、大抵の場合、有資格者が何人もいるものなので、全く関係ない業種の人が高い金を払って取る必要性も価値もない。

話は戻って「食品衛生責任者」であるが、食品衛生管理者（になれる資格を持つ人）および調理師、製菓衛生士、栄養士等の有資格者はデフォルトで有資格者である。それでは「メイド喫茶」を開店しようとする一般人が保険所から営業許可を貰うために、どうやって資格を取ればよいのか？答えは厚生労働省の天下り機関（食品衛生協会）が実施する講習会に参加すればよいのである（どこで受講しても資格は全都道府県で通用する）。

というわけで、東京都で毎月実施されている講習会に参加してみた。何気にニーズは高い資格だけに、東京都では毎月7～9回程度実施されている。詳しくは東京都衛生協会のサイト（<http://www.toshoku.or.jp/>）を見てほしいが、一ヶ月前に200人近い定員が満席になることも珍しくないの、必要な人は早めに申し込み（郵送のみ）が必要。午後開始前にも在席確認（氏名記入）があるので、途中で抜け出すことは不可。当日は朝9時半ぐらいまでに集合で、参加費1万円をその場で支払う。一応、午前3時間（衛生法規・公衆衛生学）・午後3時間（食品衛生学）の講義ということになっているが、日本語がろくにわからない中国人やイラン人なんかでも、1万円払って名前と住所を書き、6時間座っていれば取ることができる程度のものである、とりたてて難しいものでもない。「萌え」がどうだのといった標語を唱和させられることから始めて、脈絡がない所で講師が手品を始めてみたり、金がかかっていそう割にしょうもない音声シンクロ型スライド（平成10年作成）を見せられたりしているうちに終わってしまうはずだ。一応、最後にテストがあるのだが、全7問・3択で、しかも講義の中で問題と回答をそのまま教えているのだから、どうやって間違えようがない。と思ったら、参加者191名のうち12-20名は最低でも一問は間違っていたらしい。しかしこのテストで落ちたという話は聞いたことがないので、平日に一日時間を潰す気にさえなれば、夕方には立派な「食品衛生責任者手帳」を手にすることが可能である。

爆発野郎

昔も今も、爆発は男の浪漫である。とはいえ、そうは簡単に火薬・爆薬（火薬類）は手に入らないし、ましてや合法的に製造するのは困難である。

日本の縦割り行政を反映して、火薬類の製造および保管・使用管理は経済産業省が、発破時の労働者の安全確保は厚生労働省が、それぞれ管轄している（路上運搬時のみ公安委員会も所轄）。それに伴って資格も「火薬類製造（取扱）保安責任者」（火薬類取締法にもとづく）と「発破技師」（労働安全衛生法にもとづく）の2本立てとなっている。発破作業に従事するには（原則的に）発破技士の資格が必要で、これは資格試験に合格しないともらえない。その受験資格は実務経験か、実技を含む2日間の講習会参加である。一方、火薬類取扱保安責任者は火薬の保管・消費の際の保安管理が仕事だが、自ら発破作業を行うこともできる。つまり事実上、火薬類取扱保安責任者は発破技師の上位資格（監督者資格）にあたる。ただし火薬類取扱保安責任者は火薬の製造所における保安管理業務はできない。火薬類の製造には火薬類製造保安責任者の資格が必要で、逆にこれ一つあれば取扱保安責任者にもなれる。なお、火薬類製造（取扱）保安責任者になるにはペーパーテストに合格するだけでよいので、ダイナマイトなど見たこともなくても資格を取ることは可能である。

ということで、まずは甲種火薬類取扱保安責任者の資格を取ってみることにした。甲種と乙種の違いは、保安責任者になれる火薬類の量の違いである。ただし、試験の難易度も受験料の高さもそれほど変わらないので、どうせ受験するのなら甲種を受ける方がお勧め。丙種製造保安は試験内容が「煙火」（打ち上げ花火）に特化しているのと、良い問題集がないのが難点である。甲・乙種取扱保安および丙種製造の試験と、発破技士講習会は、全国の火薬類保安協会（<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~ZENKAKYO/>）が実施している。試験は毎年、8月終わり頃の日曜日に行われている。市販の問題集はオーム社の「火薬類取扱者試験完全対策」しかないが、はじめからこれを使うとわかるものもわからないので、KYS研究会の「試験問題の解答と解説」を入手することが重要。東京の保安協会に在庫がない場合、他の協会を紹介してもらえるので、そこに電話を入れると購入方法がわかる（郵便振替を利用する場合、1週間ぐらいで現物が届く）。「一般火薬学」「火薬類取締法令の要点」は読まなくても合格は可能。1～2ヶ月も勉強すれば、十分に合格点が取れるはずなので、7月ぐらいから準備を進めるとよろしいのかと。なお、試験問題の形式は（計算問題以外は）「4つの選択肢のうち、正しいもの2つの組み合わせはどれか」という形なので、覚えるべき所はきちんと覚えておくべきである。受験生は土方系ばかりかと思っていたが、意外とリーマン系の若者も多い。数日以内に保安協会のサイトに回答が掲載されるので、問題用紙に印をつけておけば、自己採点可能。10月半ばに結果通知と免状申請説明が届くが、都庁の受付期間は2日間（午前9時30分～11時30分と午後1時15分～3時30分）。しかも「郵便で受付なし」という、勤労者無視のお役所クオリティー。それにも負けず、年休を取って都庁まで出かけると、石原慎太郎の名前入り免許証がgetできる。

毒劇物&危険物

火薬も十分にアレげだが、一般人に対してよりアピールするヤバ目な資格といえば、やはり「毒劇物取扱責任者」だろう。毒物及び劇物取締法に基づき、毒物又は劇物を取り扱う場合には、国又は各都道府県の登録、許可、届出が必要であり、毒物又は劇物の製造業、輸入業又は販売業には専任の「毒物劇物取扱責任者」を設置する義務がある。薬剤師と応用化学系の高校～大学を卒業した人は自動的に有資格者になっているのだが、それ以外の人は都道府県の行う試験に合格しないと資格が得られない。毒物又は劇物の製造業、輸入業又は販売業社が行政窓口申請書を出す時に、選定した責任者（有資格者）の薬剤師免許証・卒業証明書あるいは試験の合格証書を添付することになっている。使う機会がそれだけなので、仮に試験に合格しても免許や個人に対する証明書は発行されない。正直、この資格が業務に必要な職場では有資格者があふれているので、無関係な人がわざわざ受験してもあまりメリットはないだろう。

一方、そのものズバリの「危険物取扱者」は、毒劇物や火薬類の取り扱い資格よりもはるかに使いようがある。その昔は乙種以上の受験には半年以上の実務経験が要求されたが、最近は誰でも乙種まで受験できるようになっている。ただし、一般世間でニーズがあるものは、ほとんど「乙4」（乙種4類）でカバーできてしまうので、マニア以外は「乙種全制覇」（1～6種）など不要である。また火薬類製造（取扱）保安責任者の有資格者は1類と5類の試験で一部免除が受けられる。甲種を取れば全ての危険物の取り扱いが可能であるが、受験のためには大学で化学系単位を一定数以上取るか、2年以上の実務経験が必要である。なお試験の詳細は消防試験センターのサイト（<http://www.shoubo-shiken.or.jp/>）を参考。

たまたま私は受験資格があったので、せっかくだから甲種の試験を受けてみた。高校の化学の知識が頭に残っていて、そこそこに記憶力のあるヤングならば、それほど難しくはないものだと思うが、新中年の域に入ってから勉強を始めるとなると、そこは些少の努力が必要である。工業化学系大学卒業15年程度の場合でいうと、奥吉新平の「これだけ！危険物試験合格大作戦！！」と「甲種危険物取扱者問題集」（いずれも弘文社）を2回流す程度で一応の内容は把握できる。本気でやるならば3日あれば十分だが、仕事持ちだと予定が狂いがちになり、そのうちに覚えたことも忘れてしまうので、もう少し早めにスタートしておいた方がよいかもしれない。会場に出かけてみると、大真面目にノートを作っている人や、何冊もの参考書や問題集を買集めている人もいたが、そこまでの激しい努力をするほどのものとは思えない。上記の2冊で合格に必要な点数は取れる範囲はカバーしているはずだが、実際に試験を受けてみるとわかるように、知識のあいまいな点がかなり響いてくる。私の隣に座っていた某航空学校の学生（乙4だったが）は消しゴムでサイコロを作ってマークシートを埋めていたようだが、手を抜かずに参考書に書いていることを覚えておくことが理想ではある（ただし、細かい数字ものは捨てても何とかかなりそうなる予感）。なお、免許証は運転免許証のようなラミネートカードである。

スモッグトン&ヘドロンガー

1960 年代後半～70 年代は「公害」が大きな社会問題になっており、「コンドールマン」だの、「ゲゲゲの鬼太郎」だのといったお子様向けのTV番組でも、「環境汚染」が取り上げられていたものだ。そういう事情もあって、1967 年に公害対策基本法、1968 年に大気汚染防止法、1970 年には水質汚濁防止法がそれぞれ制定された。1970 年の「公害国会」でこれらの法律は一夜にして改正されたのだが、実際の工場の現場で公害を防止するための体制（人的組織）が十分に組織されていなかった。そういう事情から、1971 年に「特定工場における公害防止組織の整備に関する法律」が制定され、「公害防止管理者」というものが誕生することになった。2005 年現在の所、「大気」「水質」「騒音・振動」「粉じん」「ダイオキシン類」に対する公害防止管理者と、大気・水質（いずれも有害物を含まない）をカバーする公害防止主任管理者があり、年 1 回試験が行われている（講習で取る方法もある）。大気・水質は排出物の量と、有害物の有無によって 1～4 種があり、1 種を取れば全ての排出物をカバーする。だから、大気 1 種と水質 1 種を取れば、主任管理者の業務は可能であるし、さらに講習を受講することでダイオキシン類の資格も get できる 2006 年度から試験制度が改正されることが決定しているので、受験希望者は環境省の天下り機関である産業環境管理協会のサイト（http://www.jemai.or.jp/JEMAI_DYNAMIC/）で情報を集めた方がよいだろう。以下に書くのは 2005 年度の水質 1 種試験に関するものである。

2005 年度までは「公害概論」「水質汚濁関係法令」「測定技術」「汚水等処理技術一般」「水質汚濁関係有害物質処理技術」の 5 科目が全て 4 割以上で、かつ全体で 6 割以上の得点を取れば合格であった。ネットサーフィンして調べてみたところ「今年で受験 5 回目」なんていうベテランもいたこともあって、正直、「やる気なく一ヶ月勉強したぐらいではダメなのか？」とも思ったが、ヤバ気なところは「ウ コ処理技術」の知識で何とかカバーし、75%（57/76）程度の正解率は叩き出せた模様。もっとも、科目合格制度導入に伴って、全ての科目で 6 割以上正解が求められる（のでは？）という観測もあるので、翌年受けていたら公害原論で足切りになっていた可能性もある。なお、この試験の合格率が 20%程度しかない理由は、試験で特段に高レベルな内容が問われているからというよりは、「化学屋さんは無機汚染物質処理・機器分析の知識はあるが、普通、大学で污泥処理なんて勉強しない」「生物処理屋になる人は土木工学系出身の人が多く、あまり無機・物理化学や機器分析等を勉強していない」という事情があるためで、その筋の大学を出た人 or 現場で排水処理をやっている人でも、合格したければ自分で+ の勉強をしないとイケない。

全般的な感じでは、計算問題はここ数年、それほど難しいものは出ていない模様。必要な知識を身につけるために数ヶ月もかけて「公害防止の技術と法規」のような厚い教科書を読まなくても、オーム社の「水質関係精選問題集」を 3 回ぐらい回して、選択肢の正解・間違いの理由が何となくわかるようになっていれば、どうにかごまかせるものなのかなとも思われる。なお、1 種合格証には経済産業大臣と環境大臣のサインが入ってます。

リストラ予備軍ご用達

「ビルメン4つ道具」なる資格がある。「危険物乙4」「3種冷凍」「2種電工」および「2級ボイラ」である。もともとビル管理は定年退職した技術者たちの職場という色が強かったので、当然、この手の資格は持っているわけである。ところが最近ではリストラに怯える中高齢ヲヤジや就職の見つからない若者たちの間で、「この手の資格を取れば仕事にありつける」という誤解が広がっているためか、ビルメン4つ道具は大人気である。

ということで、今回は流行に乗って、2級ボイラー技士の免許を取ることにした。ボイラーというのは、熱で湯を沸かして蒸気または温水を作る装置であって、一定サイズ以上のものを取り扱うためには2級以上のボイラー技士の資格が必要である。伝熱面積の大きさによって主任として選任されるための資格が異なり、上の資格ほど大きなボイラーを取り扱うことができる。試験科目は4科目で計算問題は出ない。全て4割以上正解かつ全体で6割正解すれば合格。3日も勉強をすれば誰でも受かりそうな気がするのだが、実際の所、合格率は50%前後らしい。2級試験の受験には実務経験が必要だが、厚生労働官僚の天下り機関が実施する3日間の技術講習を受けると、受験資格が得られる仕掛けになっている。言ってみれば国家公認の資格商法であるが、多分、かなりの人はこのルートで資格を得ているはずだ。講習は学科が2日間・実技が1日。受講料は1万円だが、他に(社)日本ボイラー協会の「ボイラー実技テキスト」と「ボイラー図鑑」(いずれも1100円)が必要(ということになっているが、図鑑はなくとも何とかなる模様)。関東地域では市原の交通不便極まりない地域に安全衛生技術センター(<http://www.cc.rim.or.jp/%7Ekanto3/index.htm>)があって、ここで平日に講習や試験が行われている。ただし、年に一度、各都県で出張講習・試験が行われていて、こちらはまだしも一般の勤め人に優しい日程と場所になっている。特に2004年の茨城県は、講習の学科2日目だけ平日なので(GW中に遊びに行く気がない人には)極めて都合のよい日程配置になっていた。

茨城の出張講習は水戸市で行われ、250人ほどが参加していた。(多分)女性の参加はゼロで、「ウホっ、男だらけの(以下略)」といった感じである。参加層は20代から退職間近のヲヤジと幅広く、ドキュソとリストラ予備軍みたいな奴がかなり目についた模様。学科講習は朝9時から夕方5時まで正午の休憩1時間をはさみ、一日7コマ(1コマ50分+休憩10分)2日間で、「実技テキスト」全106ページの解説を聞くというもの(本当に全ページを説明する)。3人掛けの長机に3人で、かなり密に人が押し込められているので、座っているだけでも十分に疲れる。正直、書いている内容を要約しているだけなので、「あらかじめ予習をしていこう」などという気をおこすと、講義中に寝るしかなくなってしまう。興味深く話を聞くためには「知識ゼロ」で会場に向かうことが肝要である。始め半日でボイラーの基本構造と動作原理を把握してしまえば、細かそうに見える規定も、合理的なもの以外の何でもない(まあ、この辺は工学に関するセンスの問題もあるが...)。講義は工場上がりの専任講師が担当していたが、話のうまさ(観客の引き付け方)は東京の食品衛

生協会の方が上だった模様（「観客のやる気のなさ」という点ではどっちもどっちだが）。

テキスト等は参加申し込みの時に注文しておけば現地で手に入り、当日にも販売が行われていた。いろいろな本が注文リストに掲載されていて、老人ほど山のように買い込んでいた様子。金が余っている人は好きにすればよいと思うが、強制購入以外に必要なのは「試験標準問題集」（黄色本）ぐらいだろう。「問題集だけやればよい」という意見もあるが、この問題集は文字通り「問題と回答番号」しか掲載されていない。資格マニアが「合格すればよい」という考えで受験する分にはこれでもよいと思うが、どうせ勉強するならば、もう少し親切な参考書を入手した方がよいと思う。

講習の第3日目は工場実習。出張講習には全体で約250人程度が参加しているのだが、これを金・土・日3日間に割り振り、かつ日曜は2会場で回していた模様。スタートは朝9時なので、日曜日だというのに朝一のバスとJRを使い、2時間ぐらいかけて、某製鉄工場まで出かけることになった。その内容だが、まずこの工場で運転しているボイラー（水管型）の構造説明を30分程度行い、続いて参加者約60名を2グループに分けて、交代で座学と実地研修を行った。昔は「ボイラーに石炭を投げ込む」みたいなことをやっていたそうだが、今時、そういうものは流行らないので、ボイラー協会謹製の「運転シュミレーター」（炉筒煙管型）を使って1時間ほど講義（何人か指名されて、点火操作などをやらされた）。続いて工場に入って実機の説明と、水量計の検査操作（これも数名だけだが）を一時間弱。「雨が降ったら14時ぐらいまでやろうかと考えていた」そうだが、「天気がいいので午前中で終了」ということで、12時ぐらいに講習終了証を受け取っておしまい。

さらにこの講習修了書をつけて受験申し込みを行い、7月にもう一度、水戸まで出張試験の受験に出かけるわけである（千葉の僻地まで行けば、定期的に試験を実施している）。試験そのものは、まともに講習を聞いて、問題集を一回も回しておけば落ちようがない程度のもの。合格通知を添付して地方労働局宛に免許申請を行うと、ラミネートカード型の免許証が get できる。なお、2級の免許の交付を受けた後は、いつでも1級ボイラー技師試験の受験資格がある。しかしその合格後、2年以上（作業主任であれば1年以上）の実務経験がないと、免許の交付が行われない（1級試験の合格証は無期限有効）。

正直、4日間も交通不便な所まで通う「時間」と、何だかんだといって2万円以上もかかる「金」という点から見ると、いい年した定職ある社会人が受験してペイするのかどうか、という点には疑問が残る。とはいえ、メカニクなものが嫌いではない人が、ちょっとそういう空気に触れてみたいというのなら、それほど悪いこともないだろうとも思われる。ただし、世間では要免許なボイラーはどんどん減っているのだから、これからボイラーの資格を取っても大して役には立たないかもしれない。

今、ビルメン志願者の間で旬なのは「電験3種」（電気事業主任技術者資格第3種）らしいのだが、これは強電系が好きな人が、真面目に一年くらいは勉強しないと取れそうもないような代物なので、「趣味の学習」の範囲を超えているように思われる。ただし、電工と違って実技試験はないので、「パイプ曲げ」ができなくてもOKではある。

めざせ！エリート・リーマン

ブルーカラーご用達の資格はわかったとして、それではホワイトカラーなリーマンは何を勉強すればよいのだろうか。一つの回答はやはり、「法律」だろう。しかし困ったことに、法律系の国家資格は司法試験のように著しく面倒か、行書のように取っても食えなければ本業にも大して役に立たないものばかりである。ところが最近になって、法律関係の検定試験が立て続けに誕生した。一つは「法学検定」であり、もう一つは「ビジネス法務検定」である。

法学検定 (<http://www.jlf.or.jp/hogaku/index.shtml>) は、日弁連法務研究財団が年に一度実施しているもので、4 級から 2 級までである。まあ 4 級を受ける人はいないと思うし、2 級はそこそこのレベルの法学部卒業生がそれなりに勉強しないと受からないそうなので、素人はまず 3 級からスタートしてみればよいのだろう。この場合、「法学一般」「民法」が必須で、あとはコースによって 2 科目を選択することになる。2005 年に行政コースで受験した時の試験会場の面子は 20 代後半～40 代以上と幅広く、女性もちろほと見受けられた。公式サイト上の回答を利用した自己採点の結果によれば、公式問題集を一度回しておけば、何とか正答率 7 割ぐらいまで到達できそうなのが判明。幸いなことにこの試験は科目別の脚きりがなく、75 問中 45 問正解すれば合格である。ただし、民法に関しては問題集を解くだけでは体系的な知識が身につかないので、物件法・債権法等の入門書には目を通しておいた方が、後々になって苦労しなくて済むと思われる。

ビジネス法務検定 (<http://www.kentei.org/houmu/>) は東京商工会議所が年 2 回実施している検定試験で、3 ～ 1 級がある。3 級は「合格証書が欲しい人」以外にはあまり意味はなく、逆に 1 級は法学部出身者が真面目に取り組んでやっと合格する程度の記述式試験なので、これまた忙しいリーマンの趣味の自己啓発には向かない。というので、狙い目は 2 級である。この検定のよい所は、web 上で全ての申し込み手続きが終了する点である（クレジット決済の場合）。そういうわけでお気軽に申し込みはできるのだが、合格はなかなか難しい。法学検定よりも出題範囲が広いことに加えて、出題形式も「正しい選択枝の数」や「誤っている選択枝の組合せ」を選ばせる形式ばかりなので、あいまいな知識 + 消去法では、簡単に正解を導き出すことができないのだ。2005 年後期に地方で受験した時、試験会場にはもう少し若い人が多いかと思っていたが、回りは 30 代後半から 40 代とおぼしき中年ヲヤジばかりで、80 人ぐらいの中に女性は 1 割もいなかった。試験時間は 2 時間なのだが、試験終了前に席を立った奴も数名しかいない、というより時間が足りない風味で、十分に回答を見直す暇もなかった。翌日には TAC などが予想回答を発表するので、持ち帰り問題用紙で自己採点できるのだが、2 週間で公式問題集を半分流しただけでは、ぎりぎりの所で合格点には届かないことが判明した。とはいえ、数ヶ月かけてきちんと公式教科書と問題集をこなせば、おそらく何とかなる程度のものではあろう。